

Change

公式化・定式化

Adler's changes were in his theoretical formulations—in the direction away from a mechanistic-causalistic model of man and toward a humanistic-finalistic model.

→ 11月7日資料2参照

アドラーの変遷は、機械論的・原因論的な人間モデルから、人間学的・目的論的モデルへの理論の定式化の中にある。

意味的には but

有機体・生物

When Adler wrote in 1907 about organ inferiority and compensation / it was a step toward an organismic orientation, although he was still causalistic in his expression, and his concept of motivation was essentially one of homeostasis / through emphasis on the central as against the peripheral and autonomic nervous system.

動機づけ
動きを決める心

ホメオスタシス
恒常性・生体内の安定をめざす傾向

アドラーは1907年に器官劣等性と補償について論文を書いたが、これは（機械論から）有機体論的方向に向かう一歩であった。

アドラーの表現はまだ原因論的であったが、動機づけについての概念は基本的に（全体論的な）ホメオスタシスのものであり、抹消神経および自律神経系ではなく中枢神経系を強調していた。

1907年 『器官劣等性の研究』 Studie über die Minderwertigkeit von Organen

この本は精神分析理論を身体医学から補足したものとみなされて、フロイトもこの本に好意をもっていた。『無意識の発見（下）』アンリ・エレンベルガー p.204 上段（96）

攻撃性衝動

When he introduced in 1908 the concept of the aggression drive / he took again a step away from elementarism and toward holism / in that this was the result of a confluence of several drives, although he still spoke in terms of a drive psychology.

要素論 elementarism?

? 衝動（動因）心理学?

1908年に攻撃性衝動の概念を導入した際は、要素論から全体論への歩みをもう一歩進めた。その中で、攻撃性衝動は複数の衝動の集まった結果だと述べているが、まだ彼は衝動心理学の用語で語っている。

1908年 『人生と神経症における攻撃性衝動』

Der Aggressionstrieb in Leben und in der Neurose

1908年ごろには、アドラーはすでにリビドーを心的活動の主要な力動源とするフロイトの基本概念に異論を唱えていた。彼は、リビドーの欲求不満から生じたものとしては説明のつかない攻撃欲動が存在し、それは正常な人生でも神経症でもリビドーに劣らない重要な役割を演じるものだということを主張した。『無意識の発見（下）』p.227 下段（97）

主体性

自己

When in 1910 he introduced “inferiority feeling” / he brought in the concept of the self with its subjectivity and creativity / since the feeling was not in a one-to-one relationship to actual conditions.

1910年に「劣等感」を導入した際には、
主体性と創造性を備えた自己という概念を取り入れた。
感情は現実の状況に一对一で対応していないからである。

1910年 『人生と神経症における両性具有性』

Der Psychische Hermaphroditismus in Leben und in der Neurose

1910年にアドラーは心理的な男女同体についての理論を提起した。経験の示すところによれば、神経症患者の中には自分と反対の性の二次性徴が目立って高頻度に見いだされる、と彼は言う。このことが患者に主観的な劣等感を起こさせ、患者は男性的抗議の形での代償を求めて努力することになる。『無意識の発見（下）』pp.227-228（98）

理論編のノートより： 「男性的抗議」

女性であることが器官劣等性としてはたらく当時の社会があった

男性的抗議があると、性機能の問題をかかえる（生理痛・習慣性流産など）

神経症的になる とアドラーは言った

When in 1910-1912 Adler introduced the “masculine protest” and the “will to power” / these were decisive steps in replacing a causalistic drive psychology by a finalistic value psychology.

1910年から1912年にかけてアドラーは「男性的抗議」と「力への意志」を導入した。これらによって原因論的衝動心理学に代わり、目的論的価値の心理学へと明確に歩みを進めたのである。

1911年1月4日と2月1日の2回の回でアドラーは「精神分析学の諸問題」 *Probleme der Psychoanalyse* および「男性的抗議」 *Männlicher Protest* についてそれぞれ講演をした。『無意識の発見（下）』p.204 下段

→1911年2月の会以降、精神分析学会を離脱

理論編のノートより： 1911年フロイトとケンカ別れ

エディプス・コンプレックスをめぐって対立

アドラーの解釈 1) 性的なものではない

- 2) 全ての子どもにあるわけではなく、
甘やかされた子どもにだけある

1912年 『神経症性格について』 *Über den Nervösen Charakter* (99)

Much of our view of the enhancement of the self-esteem as the guiding fiction is included in Nietzsche's "will to power" and "will to seem." IPAA p.111

自尊心を増幅させるものはそれを導く虚構であるというわれわれの見解は、ニーチェの言う「力への意志」および「見せかけへの意志」を含んでいる。

力への意志(ちからへのいし、英: Will to Power、独: Wille zur Macht)は、ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの後期著作に登場する、突出した哲学的概念のひとつである。

力への意志は、ニーチェの考えによれば人間を動かす根源的な動機である: 達成、野心、「生きている間に、できるかぎり最も良い所へ昇りつめよう」とする努力、これらはすべて力への意志の表れである。本人の著作では、「我がものとし、支配し、より以上のものとなり、より強いものとなろうとする意欲」と表現される思想である。(中略)

直接の影響を受けたのはアルフレッド・アドラーである。アドラー心理学には力への意思の概念が反映されている。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/力への意志>

1912年に出たアドラーの著書『神経質性格について』は、セネカから引用した「なにごととも見方次第だ *Omnia ex opinione suspensa sunt*」ということばをモットーにかかげているが、これはファイヒンガーの「仮構 *Fiktionen* の概念にひっつけたものである。(中略)

この書物の基本概念は「個別性 *Individualität*」であって、この語は人間存在の独自性と不可分性の両方を表現している。このことを最もよく示しているのは、序文に引用されたヴィルヒョウの「個人はすべての部分が共通の目標に向って協働する統一的全体である」ということばである。その結果、個人の示すいかなる孤立的な心理的特徴もその人の人格全体を反映することになる。『無意識の発見（下）』p.228 下段

2017/

二元論
?どこにかかるか?

When Adler first wrote about communal feeling or social interest, **Gemeinschaftsgefühl**, it was almost in opposition to **self-interest**, a **dualism** quite foreign to a holistic theory.

私利・利己心
(自己執着)

アドラーがはじめて共同体感覚、あるいは社会的関心、ゲマインシャフツゲフェール、について書いたとき、それは全体論にまったくなじまない二元論である自己執着とほぼ対比されていた。

or

アドラーがはじめて共同体感覚、あるいは社会的関心、ゲマインシャフツゲフェール、について書いたとき、それは自己執着とほぼ対比されており、全体論にはまったくなじまない二元論だった。

第一次世界大戦 1914年7月～1918年11月

アドラーは1916年(46歳)に軍医として召集され、ゼメリングの陸軍病院神経精神科へ
クラークの第15陸軍病院神経精神科
グリンツィングの陸軍病院 etc

1918年12月 『ボルシェヴィズムと心理学』 Bolschevismus und Seelenkunde (47)
「共同体感覚」初出

認知機能
ものごとに意味づけする機能

Only in the late 1920's / did he clarify that **this** was a **cognitive function**, "an innate potentiality which must be consciously developed" (p. 134).

Problems of Neurosis(1929)
IPAA p.134

1920年代の終わりになってようやくアドラーは、共同体感覚は認知機能のひとつであり、「意識的に育成しなければならない生まれながらの可能性」(p.134)であると明言した。

During this period Adler also introduced the term "life style," superseding some previous terms, / a truly holistic, humanistic **conception** previously used by the philosopher Wilhelm Dilthey and the sociologist Max Weber.

concept (概念・発想・考え) への作用
概念 (作用)・考案
the process of forming an idea or a plan

この時期アドラーは、いくつかの以前の用語に代えて「ライフ・スタイル」という用語も導入した。

これは、過去に哲学者ウィルヘルム・ディルタイと社会学者マックス・ウェーバーによって使われた真に全体論的、人間学的考案である。

Wilhelm Christian Ludwig Dilthey, [1833年11月19日 - 1911年10月1日](#)) は、[ドイツの哲学者](#)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヴィルヘルム・ディルタイ>

Max Weber, [1864年4月21日 - 1920年6月14日](#)) は、[ドイツの政治学者・社会学者・経済学者](#)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/マックス・ウェーバー>

理論編のノートより：

アドラーは、まずマルクスにかぶれた「人間は社会に組み込まれている」

次にフロイトにかぶれた（アドラーは認めないが）

次にニーチェにかぶれた「力への意志」目標追求

→いつも究極の目標は所属である

→1930年代「人間は完全な存在になろうとして目標追求する」